

プロジェクトで目指す将来の姿

過去

現在

未来 = 目指すべき姿

人と海の係り方をバージョンアップ  
→新たな里海を創る

人・社会

- ・アサリを中心とした漁獲、潮干狩
- ・アマモ等の肥料の供給
- ・活発な木材の輸入

- ・漁獲量の低迷
- ・潮干狩の中止
- ・アマモ場の劣化
- ・木材の輸入の減少

①干潟の生産力向上

- ・地元企業と協働でアサリ再生活動を展開、尾道アサリを復活させる。

②アマモ場の保全・再生

- ・「ゆりかご」としてのアマモ場を再生させ、多様性に富んだ豊かな漁場の復活

③エコツーリズムの実装

- ・尾道の観光地としてのブランドに里海(左記①②)の要素を加えたエコツアー等を企画・実装



自然

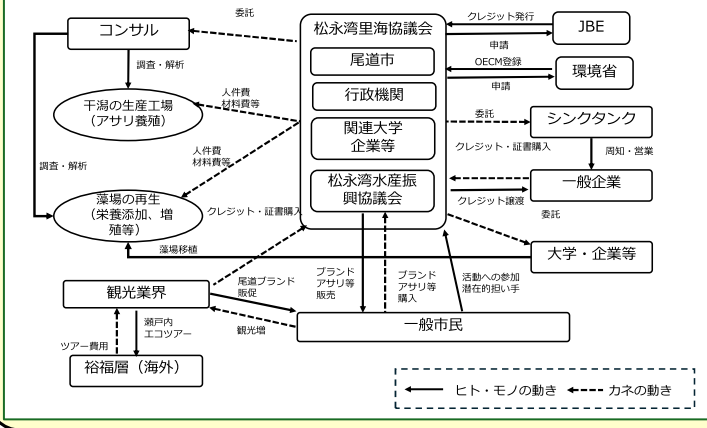
- ・干潟等の高い生産力
- ・陸からの栄養塩供給
- ・健全な栄養塩循環

- ・海水温の上昇
- ・魚類等による食圧増加
- ・陸からの栄養塩供給の減少
- ・栄養塩の不足(貧栄養化)

科学的な根拠に基づく里海づくり

④豊かな里海 尾道ブランドの構築

- ・現状のコンソーシアムを発展させた松永湾里海協議会を設立、関係者の連携体制を構築
- ・アサリやアマモ場を含めた里海としてのブランド価値を高め、経済的に自立し、継続実施するための資金調達方法を確立する。



プロジェクトの実施体制：  
産学官金連携のコンソーシアムによる実施体制

プロジェクトチーム

- 尾道東部漁協 尾道市
- クニヒロ株式会社
- 広島銀行
- 復建調査設計株式会社
- FUKKEN CO., LTD.
- 尾道観光協会
- 福山大学
- 三谷建設株式会社

連携先

- 企業
- 住民
- 学校
- 観光客



実施主体、事業名などの概要

事業名：松永湾の再生・利活用に向けた新たな里海創生プロジェクト  
実施主体：尾道東部漁業協同組合・尾道市 対象地域：広島県（松永湾）

地域の現状・課題

- 人と海の繋がりが細く・薄くなってきた
- 漁獲量（特にアサリ）の低迷、潮干狩りの中止
- アマモ場の劣化
- 海水温の上昇
- 魚類等による干潟生物・アマモへの食圧増加
- 栄養塩類の不足（貧栄養化）
- 漁業従事者の高齢化

里海づくりの目標（KGI）

人と海の関わり方をバージョンアップすることで  
新たな里海を創る

実施項目（CSF）

- Step2:実証・検証・評価**
- アサリ再生活動の拡大に向けた実証試験
  - 戦略的なアマモ再生活動の開始
  - エコツアーの試行
  - 協議会の運営
  - 自然共生サイト登録の検討
  - 持続的な資金調達方法の検討

R9取組概要  
(キーワード)

実施項目（CSF）

- Step3:自走に向けた計画策定**
- 持続的なアサリ再生活動・アマモ再生活動の拡大に向けた計画策定
  - 新たな干潟・藻場の造成計画の検討
  - エコツアーの社会実装と商品の多様化
  - 目標達成に向けた実行計画の更新

R8取組概要  
(キーワード)

実施項目（CSF）

- Step1:現状把握と事前調査**
- アサリ・アマモの再生活動
  - アサリの現況調査・FS調査
  - アマモの現況調査
  - エコツアーの企画
  - 協議会の設置
  - 次年度の計画策定

R7取組概要  
(キーワード)

# (1) 活動区域：里海づくりの対象エリア



# (1) 活動区域：干潟の生産力向上に関する実施箇所（R7d）

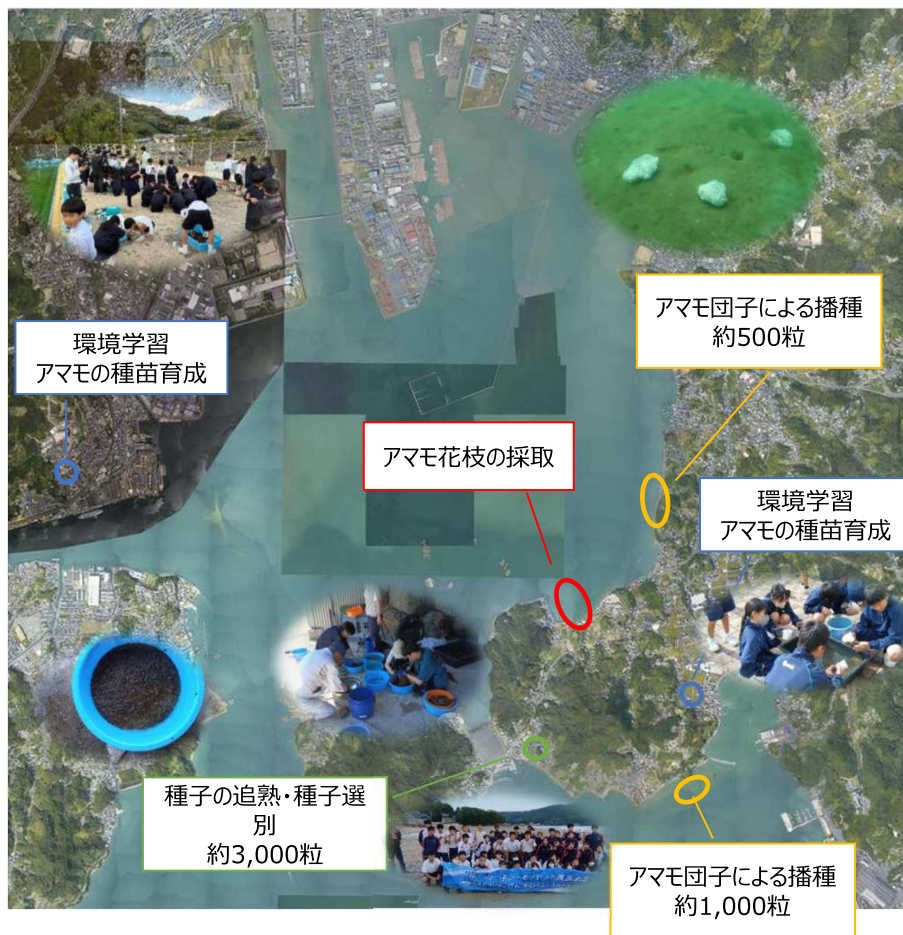
年月日	実施項目・内容
令和7年5月25日	アサリの再生活動（網張等）を実施
令和7年6月25日	アサリの再生活動（網張等）を実施
令和7年7月25日	アサリの再生活動（網張等）を実施
令和7年9月8日	アサリの再生活動（網張等）を実施
令和7年9月19～22日	干潟調査を実施（山波の洲、歌干潟、クニヒロ前干潟）
令和7年10月20日	アサリの再生活動（網張等）を実施
令和7年11月4日	アサリの再生活動（網張等）を実施
令和7年12月11日	アサリの再生活動（網張等）を実施



令和7年9月、1月：干潟調査を実施（歌干潟）

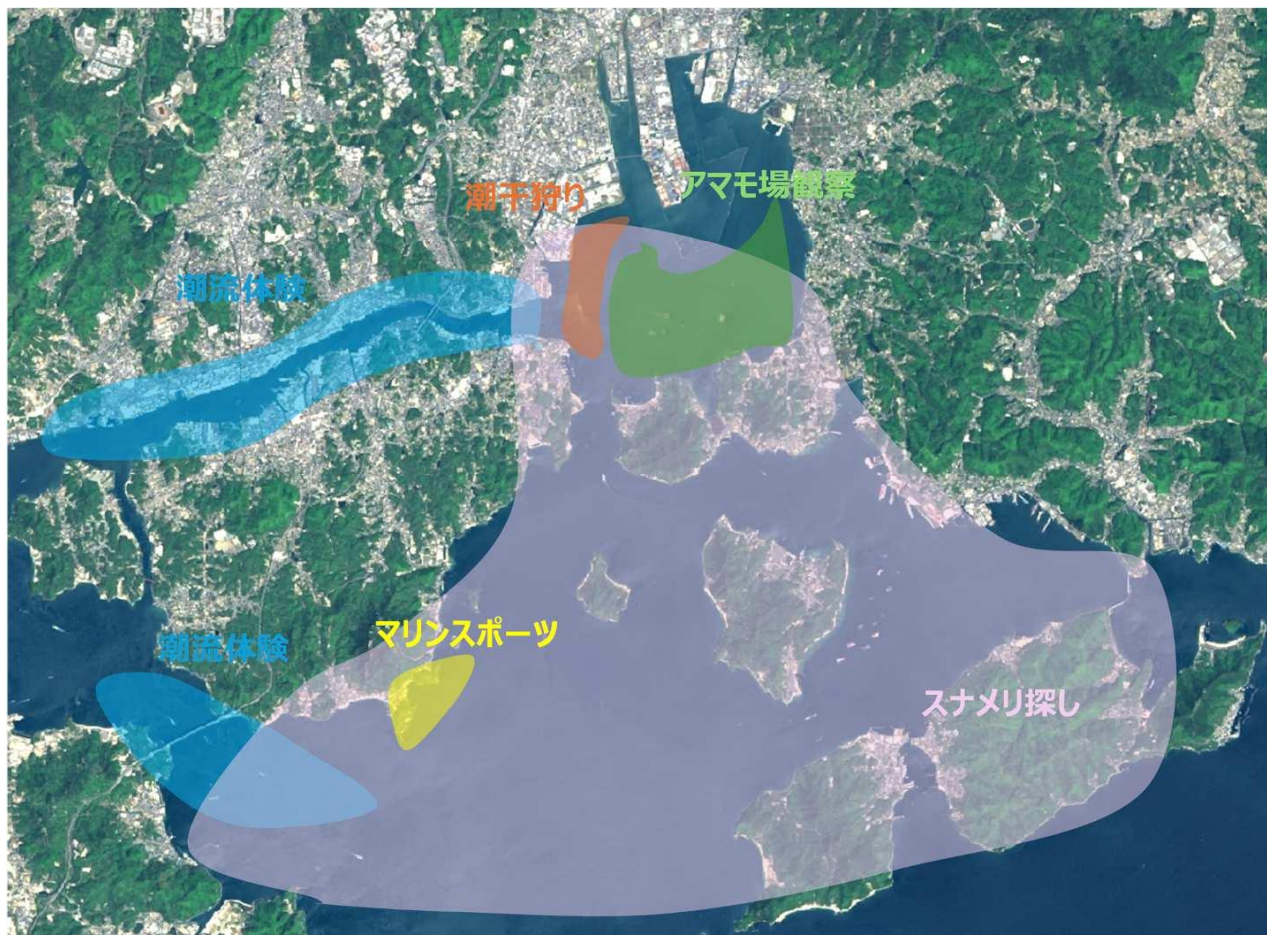
# (1) 活動区域：アマモの保全再生に関する実施箇所（R7d）

年月日	実施項目・内容
2025年5月28日	③アマモ場の再生活動 ・ 浦崎中学校と高尾干潟でアマモの花枝を採取 ・ 浦島漁港にて追熟
2025年7月16日	②アマモ場の実態調査 ・ 松永湾全域でアマモの生育状況を調査
2025年9月2日	③アマモ場の再生活動 ・ 福山大学、浦崎中学校とアマモの種子選別会を実施
2025年10月21日	④実施体制の構築 ・ 浦崎中学校においてアマモの再生に関する出前講座を実施
2025年11月2日	③アマモ場の再生活動 ・ 浦崎中学校において、アマモの種苗ポットを作成
2025年11月21日	③アマモ場の再生活動 ・ 山波小学校において、アマモの種苗ポットを作成
2025年12月17日、18日	③アマモ場の再生活動 ・ 一般会員（大成建設、万田酵素等）の参加のもと、播種用のアマモ団子の作成およびアマモの播種活動を実施



5

# (1) 活動区域：エコツアーの企画海域



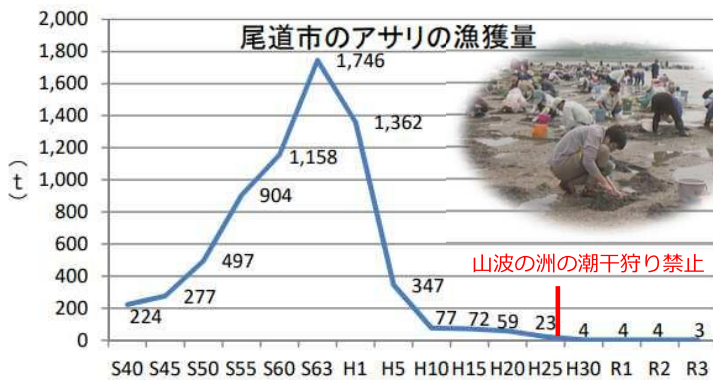
## (2) 事前調査：現状の把握と調査方法

自然環境	社会環境	自治体の施策	その他
<input type="checkbox"/> アサリの現況把握 ・文献調査 ・アサリの殻長・個体数 ・底質（ORP・粒度・IL等） ・水質（透明度、水温等） ・地盤高  <input type="checkbox"/> アマモの現況把握 ・衛星画像解析 ・アマモの被度、面積 ・底質（ORP、粒度、IL等） ・水質（透明度、水温、塩分、DO、クロロフィル） ・底生生物（種類数・個体数・湿重量）	<input type="checkbox"/> 海岸線・土地利用の変化 <input type="checkbox"/> 港湾・漁港としての利用 <input type="checkbox"/> 産業構造 <input type="checkbox"/> 陸域負荷量の変化 <input type="checkbox"/> 漁業就業者数の変化 <input type="checkbox"/> 漁獲量の変化 <input type="checkbox"/> 遊漁（潮干狩り）等の状況 <input type="checkbox"/> 環境教育の実施状況 <input type="checkbox"/> 観光・レジャーへの利用状況	<input type="checkbox"/> 里海づくりに関連する基本計画や条例 <input type="checkbox"/> 個別の水産・観光施策等 <input type="checkbox"/> Jブルークレジットの活用や自然共生サイトへの登録実績	<input type="checkbox"/> 里海づくりに関するステークホルダーの把握 <input type="checkbox"/> ステークホルダーの活動および連携状況 <input type="checkbox"/> 里海づくりに対する公的支援
調査方法①	調査方法②	調査方法③	調査方法④
<input type="checkbox"/> コドラート法によるアサリ採取 <input type="checkbox"/> エグマンバージ・ソリネットによる底生生物採取 <input type="checkbox"/> 底質の採取・分析 <input type="checkbox"/> 多項目水質計による水質計測 <input type="checkbox"/> 水上ドローンによる地形計測 <input type="checkbox"/> 衛星画像解析	<input type="checkbox"/> 郷土史等の文献収集 <input type="checkbox"/> 統計資料収集 <input type="checkbox"/> 航空写真、衛星画像の収集 <input type="checkbox"/> 地元漁業者等へのヒアリング	<input type="checkbox"/> 自治体へのヒアリング	<input type="checkbox"/> 自治体、漁業者、民間企業へのヒアリング

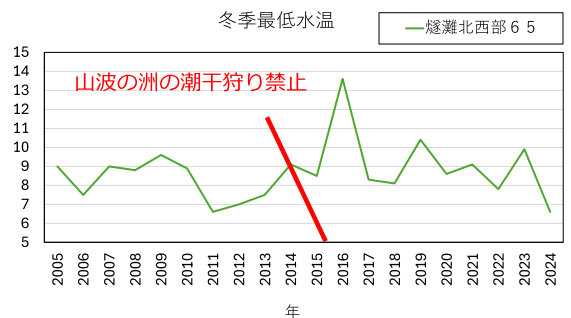
7

## (2) 事前調査：アサリの現況把握

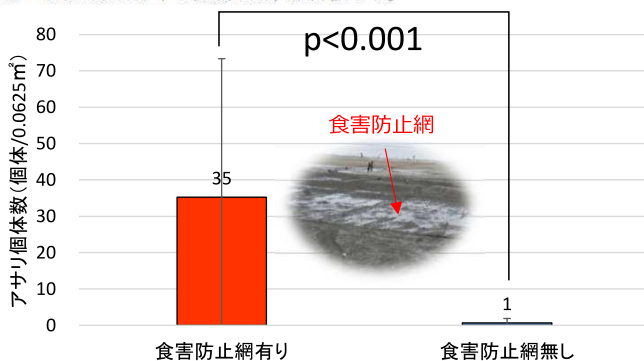
- ・山波の洲を中心としたアサリの漁獲は過去30年で1%以下まで急減。
- ・全窒素濃度は2000年以降、変化が顕著。海水温の変化は不明瞭。
- ・食害防止ネットを張ることで、アサリが生存可能なことがわかってきた。



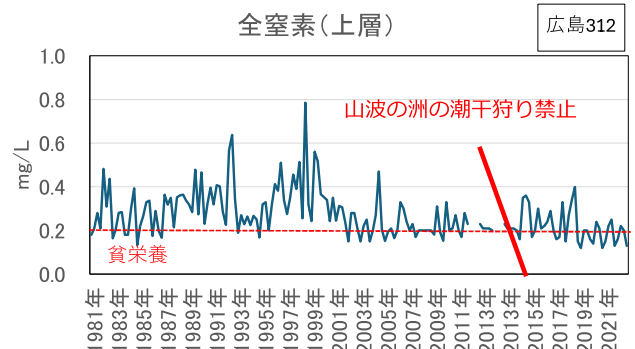
出典：尾道市水産振興ビジョン（令和6年度～令和10年度）  
 ※ 令和3(2021)年の漁獲量は、推計値です。



データ出典：水環境総合情報サイト。



2025年9月調査結果

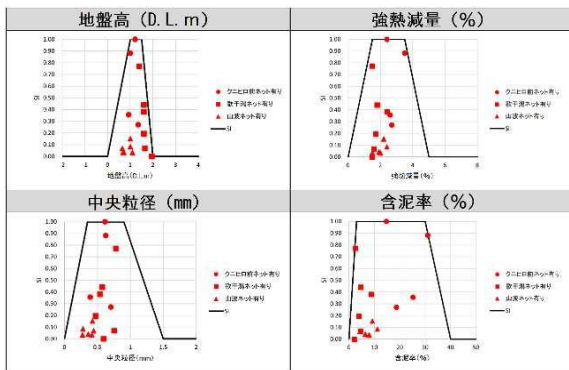


データ出典：水環境総合情報サイト。

## (2) 事前調査：アサリの漁獲ポテンシャルの推計

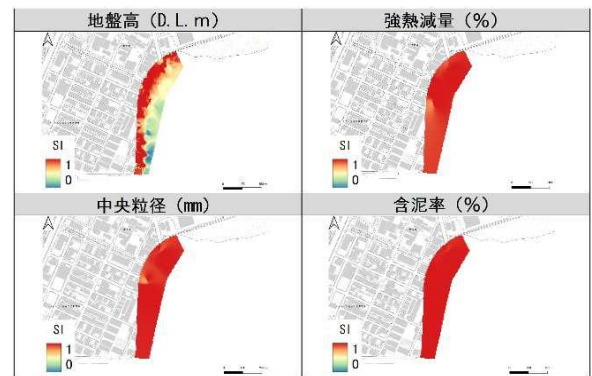
- 食害防止網を張ることでアサリの漁獲が可能となる前提で、HSIモデルによる漁獲ポテンシャルの推計を実施。
- 3干潟において計4.8ha、約20トン（現行の約4～10倍）のアサリの漁獲が可能と推定。

1. 現地調査結果と既存文献からHSIモデルを作成。

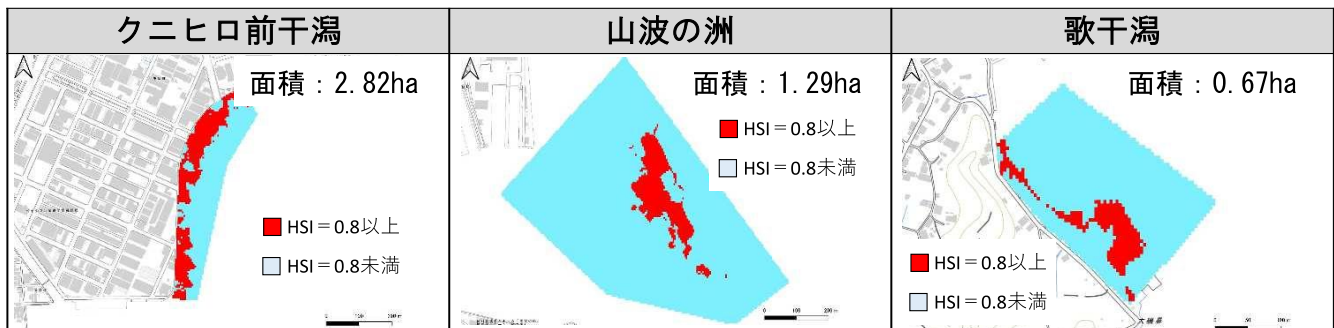


※食害の影響を受けない前提（網有）でモデル作成

2. 現地調査結果をもとに3干潟でSI値、HSI値を計算。



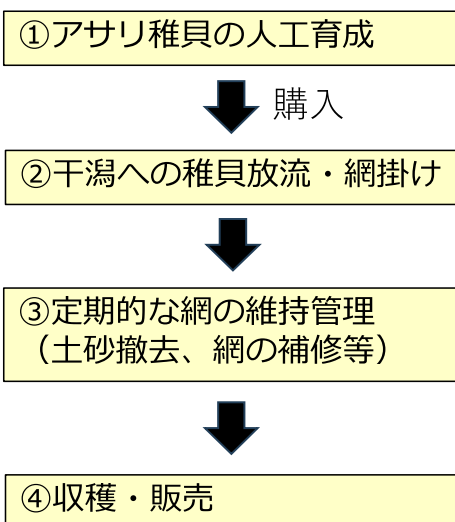
3. HSIが0.8以上を漁獲ポテンシャルのある場所と定義し、面積を算定。



9

## (2) 事前調査：アサリのFS調査

- 尾道アサリの復活に向けた実現可能性を探るため漁業者等への聞き取り調査等を実施。
- 干潟におけるアサリのポテンシャルの活かすためには、食害防止網の確保、稚貝の確保、維持管理にかかる人手の確保が重要な課題となる。
- 養殖に近い形態をとるため、高価格で販売する必要があることも分かってきており、尾道アサリのブランド化も重要課題となる。



アサリ養殖の実施手順

活動や資材等の内容	既存3干潟のポテンシャル	現状からの差分
食害防止網の設置面積	約4ヘクタール	約3ヘクタール
網の必要数	400網	約300網
アサリ稚貝の確保	5百万個体	不明
網の維持管理活動	設置1回・400網 維持管理4回・400網	設置1回・300網 維持管理4回・300網
網の設置・維持管理を実施する人工	600人・回/年 (120人/回)	450人・回/年 (90人/回)
事業採算性のある単価設定	単価3,000円/kg	※アサリ復活祭の実績価格と同等

## (2) 事前調査：アマモの現況把握

- 環境省による藻場面積データ等を収集するとともに、独自に衛星画像解析を行いアマモ場面積の推移を推定した。
- 2000年～2017年頃までは300～400ha程度推移していたが、2023年以降は150ha以下まで低下した。



2015～2017年  
アマモ場：296ha



2022～2023年  
アマモ場：144ha

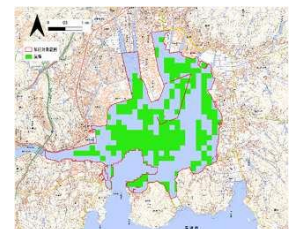
$$BI = LN(DN_i - DN_{Si}) - k_{ij} LN(DN_j - DN_{Sj})$$

$DN_i, DN_j$  底質の状態がほぼ同じ衛星画像デジタル値

$DN_{Si}, DN_{Sj}$  水深が深い箇所の衛星画像デジタル値



2017年5月

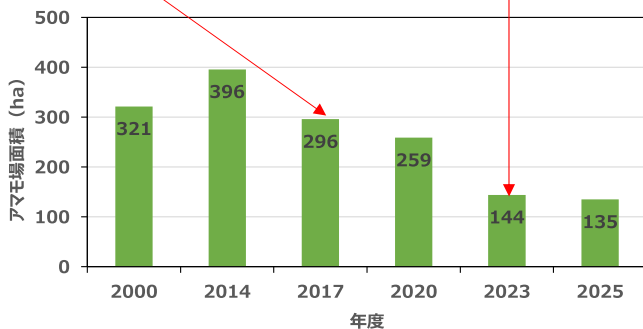


2023年4月

解析に使用した衛星画像一覧

年度	月日	衛星画像の種類
2000年	5月4日	Landsat5
2014年	5月11日	Landsat8
2017年	5月14日	Sentinel-2
2020年	6月2日	Sentinel-2
2023年	4月13日	Sentinel-2
2025年	5月27日	Sentinel-2

11



衛星画像解析で推定したアマモ場面積の推移

## (2) 事前調査：アマモの消長要因の解析

- 現地調査結果を用いた統計解析より、アマモの生育には地盤高と透明度の影響が大きく、松永湾内のアマモには光環境が重要な環境要因となっていると考えられた。
- アマモの半数は生殖株であり、栄養株も細く、丈が短かった。漁業者からは、「最近、アマモ場はあるが、アマモに元気がない」、「夏以降はアマモ場がなくなるようになった」との意見があった。

ロジスティクス回帰分析結果

変数	係数	標準誤差	p値
切片	-6.21	2.08	0.003**
地盤高	6.44	3.19	0.04*
底質ORP	-0.68	0.54	0.20
透明度	2.19	0.96	0.02*



栄養株

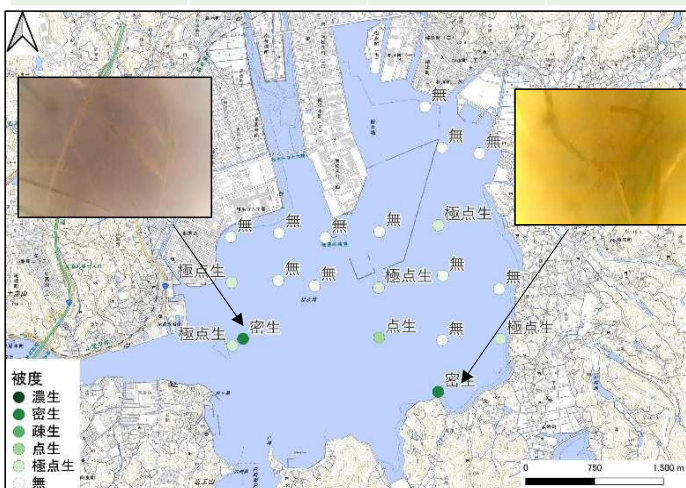
50%

生殖株

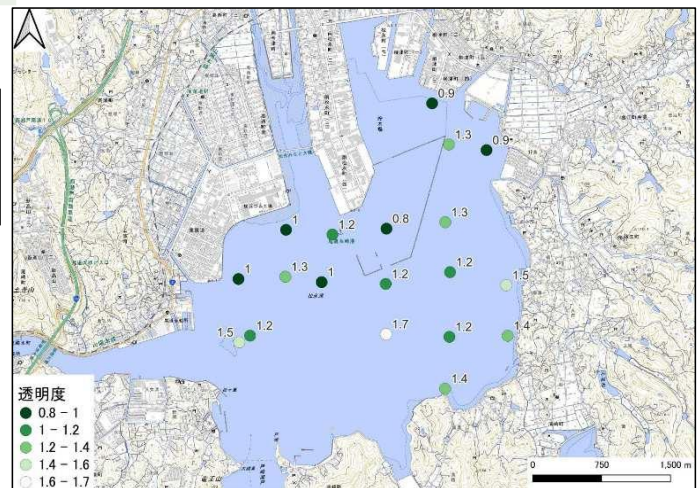
50%



アマモの形態観察



アマモの被度の調査結果 (2025年7月)



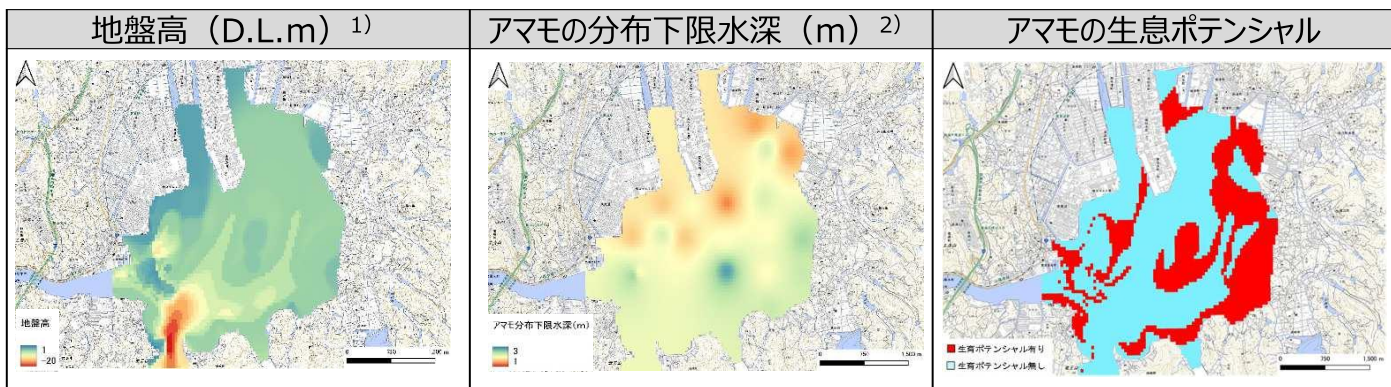
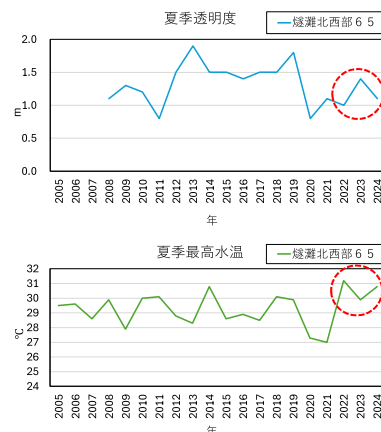
アマモの透明度の調査結果 (2025年7月)

## (2) 事前調査：アマモの生息可能面積の推定

- アマモの被度には地盤高と透明度の影響が強かったことから、アマモの分布下限水深を推計し、地盤高と比較することで生育ポテンシャルを推計した。

[分布下限水深 = 年間平均透明度 ÷ 0.95]

- 各メッシュにおいて、地盤高がアマモの分布下限水深を下回ればアマモの生育ポテンシャルがあるものとして判定した。
- 松永湾内でアマモの生育ポテンシャルがある海域面積は約400haと推計された。
- 2014年のアマモ場面積（396ha）は、生育ポテンシャルに近い状態といえる。
- 夏季水温は、2022年以降、高い水準が続いており、藻場減衰の一要因となっている可能性があるが、現時点では原因の究明までは至っていない。



1) 地盤高については令和7年7月の調査結果及び海底地形デジタルデータを用いた。

「海底地形デジタルデータ (M7017 (Ver. 2.0) 瀬戸内海東部)」 ((一財) 日本水路協会、平成20年4月発行)

2) 年間平均透明度については、7月の現地調査データを基に、公共用水域 (燧灘北西部65) の年間データを用いて推計した。

分布下限水深の算定式は「水質汚濁に係る生活環境の保全に関する環境基準の見直しについて (答申)」 (中央環境審議会、平成27年12月7日) を参照した。

## (2) 事前調査：その他の主な社会環境の変化

- 1960年代～1980年代で湾奥部の埋め立てが進み、干潟が消失。
- 陸域負荷は窒素・リン基準が施行された1999年以降急減

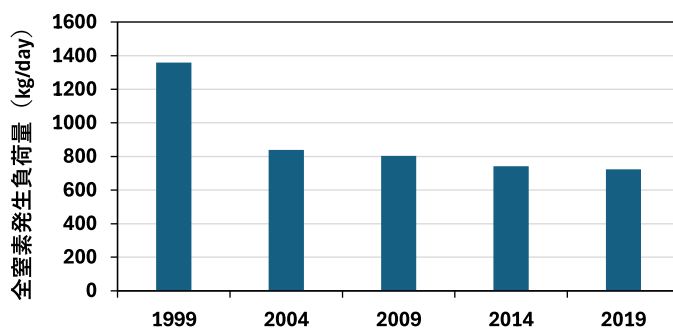


出典：国土地理院電子国土 **1960年代**



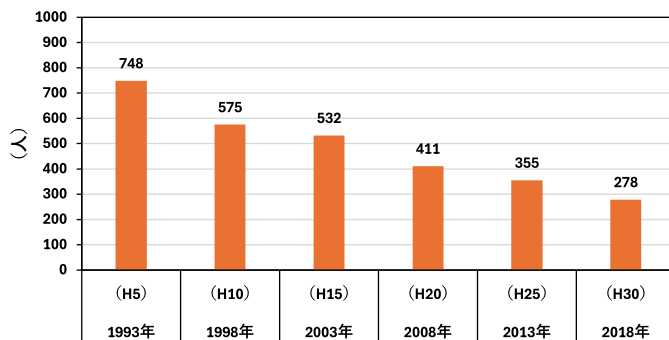
出典：国土地理院電子国土 **1980年代**

主要流入河川 (藤井川) における発生負荷量



- 漁業経営体数は過去20年で5割以上減。高齢化の進行も大きな問題。

尾道市における漁業経営体数の変化



## (2) 事前調査：みんなの里海支援事業との連携

AIを活用した地域の里海の歴史・文化の継承と里海物語づくり（実施主体：NPO法人瀬戸内さとうみ楽会）

令和7年度みんなの里海づくり支援事業＜研究支援＞（公財）国際エメックスセンター

### 背景・課題

- 経験世代の急減と原風景消失リスク：**
- 尾道市では、80歳以上の人口割合が今後急激に減少。里海の原因を知る世代がいなくなり、今後5～10年で地域の記憶が消失する危機にある。
- 従来の記憶方法の限界：**
- 文献や報告書はアクセス性が低い
  - 若年層の関心を惹きにくい
  - 写真等の貴重なデータが埋もれている



開発中イメージ①：松永湾デジタルアーカイブ  
～マップ上で、過去の環境（写真等）を閲覧可能～

### 研究内容：AIによる「生きた知識化」 オーラルヒストリー等による地域知の抽出

- 住民インタビュー、古写真収集、AI文字起こし等
- AI活用（RAGと画像生成）**
- 膨大な記録を検索・要約し、自然な対話形式で知識を提供するチャットボット開発
  - 証言やモノクロ写真から、画像生成AIによる地域の原風景の再現
  - 地域のデジタルマップ開発



開発中イメージ②：松永湾チャットボット  
～インタビュー結果に基づき、過去の松永湾の環境をAIが回答～

### 成果と目指す未来

- 世代を超えた継承：**「昔はこうだった」をビジュアルで共有し、若年層の参画を促進
- 新たな里海づくりモデル：**科学的データ・AI×地域知の融合によるコミュニティ活性化

開発中イメージ③：過去の松永湾マップ  
～インタビュー結果に基づき、過去の松永湾の環境を画像生成AIで再現～

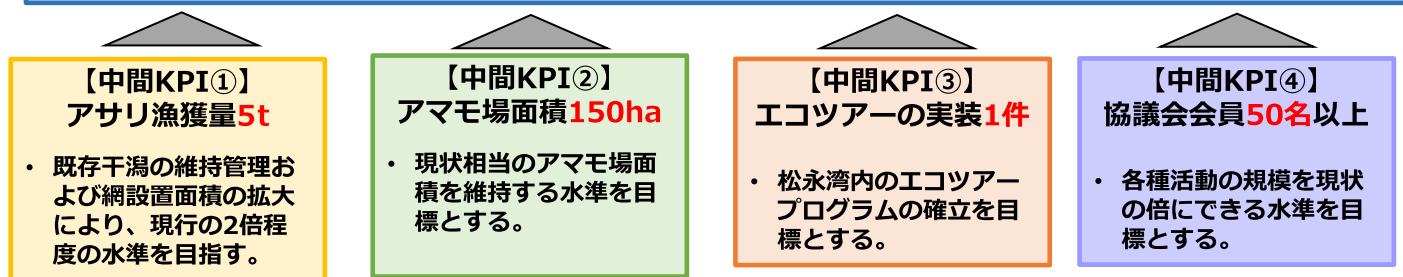
15

## (3) 目標設定と里海づくりの事業計画：KGI・KPIの設定

### 【最終KGI】人と海の関わり方をバージョンアップすることで新たな里海を創る



### 【中間KGI】最終KGI達成に向けた里海づくりの実行計画策定（2027年度）



干潟の生産力向上

アマモ場の保全・再生

エコツアーの実装

尾道のブランド化

※最終KGI、最終KPIは、実行計画策定段階で見直しを行う予定である。

### (3) 目標設定と里海づくりの事業計画：ロードマップ

	基礎調査・計画・体制構築	各種活動の試行	自律に向けた準備	自律的な里海づくり
活動	2025年度 (令和7年度)	2026年度 (令和8年度)	2027年度 (令和9年度)	2028年度以降 (令和10年度以降)
干潟生産力の向上	干潟のモニタリング（生産能力・生物多様性）と実証試験（各対策の効果の実証、効率的なアサリ生産方法の開発等）			
	アサリ再生活動のFS調査	尾道アサリの試験的な販売とブランディング		100 tの生産を目指したアサリ養殖地の拡大 尾道アサリのブランドの確立
	干潟の再生活動（耕耘・稚貝育成・保護ネット設置等）			
	干潟の再生活動の協力者の探索と実施体制の構築		目標達成に向けた実行計画の策定	
藻場の保全・再生	アマモ場の面積のモニタリング（衛星画像解析等）			
	アマモ場の実態調査と適地選定			
	アマモ場再生活動			
	アマモ場再生活動の実施体制の構築	目標達成に向けた実行計画の策定		300haのアマモの場再生に向けた取組の継続・拡大
	アマモ場の活用方策の検討			
エコツアーの実装	尾道エコツアーの広報活動			
	尾道海賊等との連携推進	エコツアー第二弾の企画・試行		継続的なエコツアーの展開とブランディング
	エコツアー第一弾の企画・試行		目標達成に向けた実行計画の策定	
豊かな里海尾道のブランド化	各種活動の資金調達方法の検討（Jブルークレジット、自然共生サイト、ふるさと納税等）			
	協議会の設置	協議会の運営・拡大（一般会員の増員等）		Jブルークレジット、ふるさと納税等の資金調達
	環境学習等の普及啓発活動の実施			継続的な協議会の運営および普及啓発活動

17

### (4) 資金計画（最終目標）

支出	
干潟生産力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>漁獲量100tを想定</li> <li>漁場確保のための覆砂事業費等は含まない</li> </ul>
□調査費 1,000万円	
□資材費 1,000万円	
□稚貝費 5,000万円	
□労務費 8,000万円	
□諸経費 5,000万円	
□小計 20,000万円	
アマモ場の保全・再生	<ul style="list-style-type: none"> <li>松永湾内の150ヘクタール以上の範囲で再生活動を行うことを想定</li> </ul>
□調査費 500万円	
□資材費 200万円	
□労務費 800万円	
□小計 1,500万円	
エコツアーの実装	<ul style="list-style-type: none"> <li>1,000人がエコツアーに参加することを想定</li> </ul>
□労務費 600万円	
□オフセット費 250万円	
□諸経費 150万円	
□小計 1,000万円	
普及活動費	
□環境学習 100万円	
□広報費 100万円	
□小計 200万円	
その他	
□会議費 100万円	
□小計 100万円	
□総計 22,300万円	

収入	
干潟生産力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>尾道アサリをブランド化し、販売単価を1kgあたり2,000円で販売することを想定</li> </ul>
□販売収益 20,000万円	
□小計 20,000万円	
アマモ場の保全・再生	<ul style="list-style-type: none"> <li>Jブルークレジットは約300トン（再生面積約150ha）得ることを想定</li> <li>アマモ場の保全・再生活動には利益を求めず、漁獲の向上が利益幅となる。</li> </ul>
□Jブルークレジット収益 1,500万円	
□漁獲の販売収益の向上 a万円	
小計1,500万円+a万円	
エコツアーの実装	<ul style="list-style-type: none"> <li>1,000人がエコツアーに参加することを想定</li> </ul>
□ツアーの収益1,000万円	
□小計 1,000万円	
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>寄付については、地元企業に加え、アサリやイカの漁獲による利益の一部を回すことを想定</li> </ul>
□自然共生サイトへの寄付 250万円	
□協議会会費 50万円	
□小計 300万円	
□総計 23,300万円	

## (4) 資金計画 (中間目標: 2028年度)

支出	
干潟生産力の向上	・ 漁獲量5tを想定
□調査費 100万円	
□資材費 200万円	
□稚貝費 500万円	
□労務費 400万円	
□販管費 100万円	
□小計 1,400万円	
アマモ場の保全・再生	・ 松永湾内の15ヘクタール再生程度の範囲で活動を行うことを想定
□調査費 150万円	
□資材費 50万円	
□労務費 50万円	
□小計 250万円	
エコツアーの実装	・ 100人程度がエコツアーに参加することを想定
□労務費 30万円	
□オフセット費 10万円	
□販管費 10万円	
□小計 50万円	
普及活動費	
□環境学習 50万円	
□広報費 50万円	
□小計 100万円	
その他	
□会議費 50万円	
□小計 50万円	
□総計 1,850万円	

収入	
干潟生産力の向上	・ 尾道アサリをブランド化し、販売単価を1kgあたり3,000円で販売することを想定
□販売収益 1,500万円	
□小計 1,500万円	
アマモ場の保全・再生	・ Jブルークレジットは約50トン(再生面積約15ha)得ることを想定
□Jブルークレジット収益 250万円	
□漁獲の販売収益の向上 a万円	
小計250万円+a万円	・ アマモ場の保全・再生活動には利益を求めず、漁獲の向上が利益幅となる。
エコツアーの実装	・ 100人がエコツアーに参加することを想定
□ツアーの収益 50万円	
□小計 50万円	
その他	・ 協議会会費は企業会員を中心に設定することを想定
□協議会会費・寄付50万円	
□小計 50万円	
□総計 1,850万円	

19

## (5) 実施体制: 産学官金連携のコンソーシアムによる実施体制

**プロジェクトチーム**

プロジェクト実施主体:  
尾道東部漁協、尾道市

クニヒロ株式会社  
復建調査設計株式会社  
FUJIKEN CO., LTD.

尾道観光協会

福山大学 広島銀行  
三谷建設株式会社

**連携先**

企業 学校  
住民 観光客



### 未来 = 目指すべき姿

人と海の係り方をバージョンアップ→新たな里海を創る

#### ① 干潟生産力向上

- ・ 地元企業と協働でアサリ再生活動を展開、尾道アサリを復活させる。

#### ② アマモ場の保全・再生

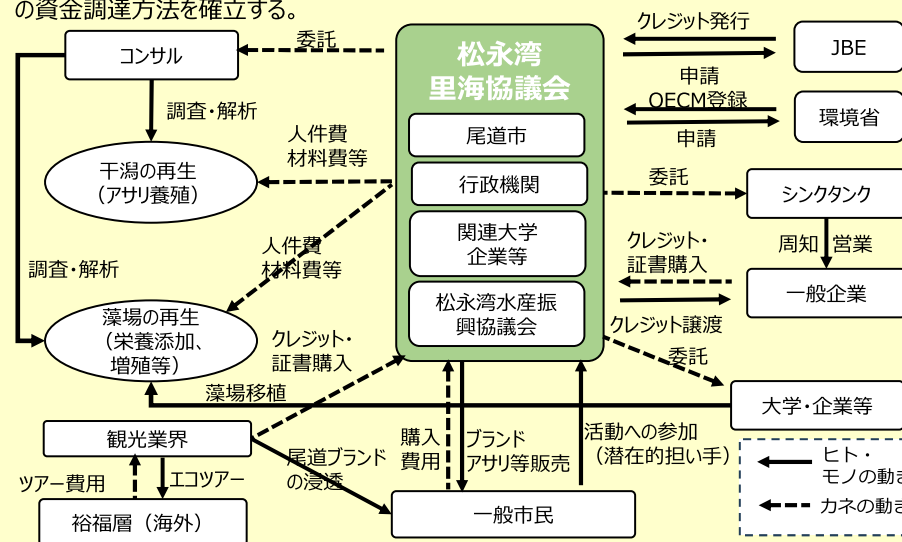
- ・ 「ゆりかご」としてのアマモ場を再生させ、多様性に富んだ豊かな漁場の復活

#### ③ エコツーリズムの実装

- ・ 尾道の観光地としてのブランドに里海(左記①②)の要素を加えたエコツアー等を企画・実装

#### ④ 豊かな里海 尾道ブランドの構築

- ・ 現状のコンソーシアムを発展させた松永湾里海協議会を設立、関係者の連携体制を構築
- ・ アサリやアマモ場を含めた里海としてのブランド価値を高め、経済的に自立し、継続実施するための資金調達方法を確立する。



2050

# (5) 実施体制：松永湾里海協議会設立記念シンポジウム

開催日時：令和7年11月17日（月） 16：00～18：00

開催場所：しまなみ交流会館

来場者数：約200名（WEB参加含む）

プログラム：

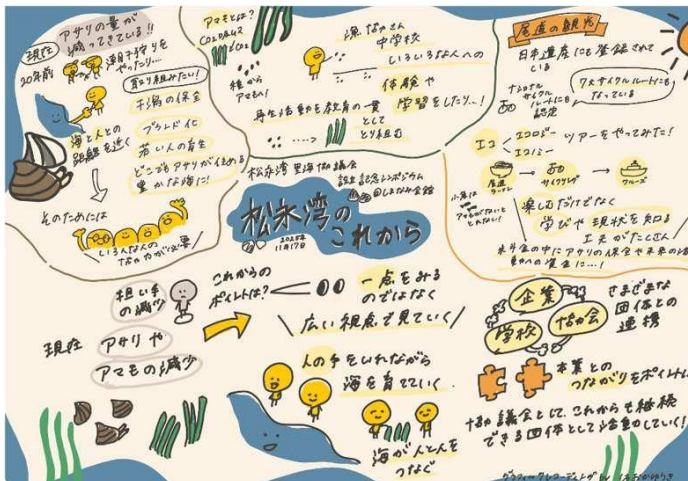
基調講演 西嶋 渉 広島大学環境安全センター長・教授

話題提供 杉本 憲司 宇部工業高等専門学校・教授

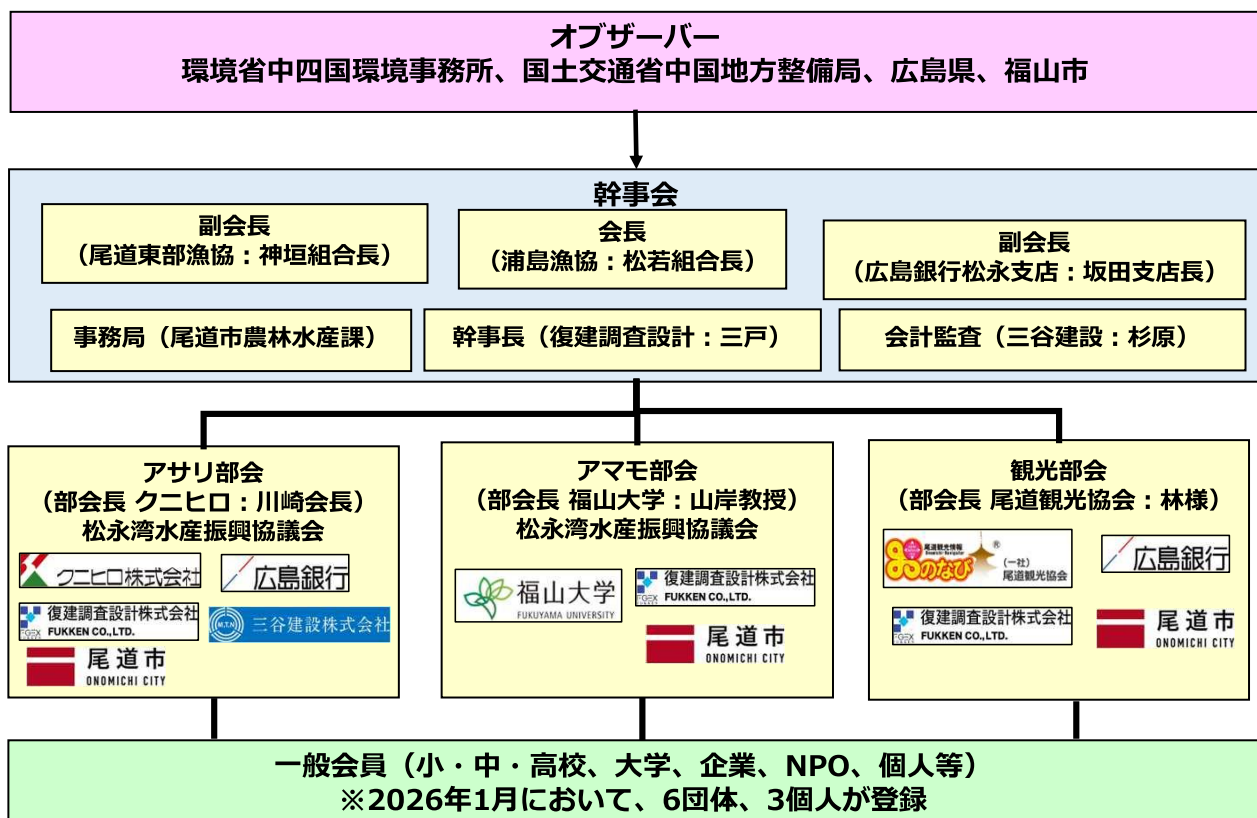
パネルディスカッション「松永湾里海協議会の展望」

モデレータ 環境省海域環境管理室 西川 絢子 室長

パネラー 松永湾里海協議会 幹事会メンバー



# (5) 実施体制：松永湾里海協議会の実施体制



## (6) 次年度の実施方針（案）

### 干潟の生産力向上

#### ① 検討対象干潟の追加

- ・ 高尾干潟等の松永湾内の他の干潟を追加

#### ② アサリ漁獲期の現地調査

- ・ アサリの漁獲期（4-5月）において現地調査を実施し、漁獲量等の推定値を更新

#### ③ 稚貝の供給能力の検証

- ・ 天然の稚貝を安定的に確保できる手法を検証（パーム採苗器等）

#### ④ アサリ再生活動の拡大

- ・ 里海協議会会員等、アサリ再生活動への参加者を増やすとともに、他の干潟での活動も検討

#### ⑤ アサリの試験販売の開始

- ・ 尾道アサリ復活祭のみならず、ええじゃん尾道等においてもブランドアサリの販売を試行

### アマモ場の保全・再生

#### ① アマモ最盛期の現地調査

- ・ アマモの最盛期（4-5月）において現地調査を実施し、アマモのポテンシャル解析や衛星画像解析による面積の推定を更新

#### ② アマモ場面積の変動要因の把握

- ・ 衛星画像解析の精度を高めアマモ場面積の長期的な変動要因を解析

#### ③ 効果的なアマモ場再生方法の検討

- ・ 各解析結果や地元の意見を踏まえ、重点的にアマモ場再生を実施する海域と手法を決定

#### ④ アマモ場再生活動の拡大

- ・ 里海協議会会員の参加や教育機関との連携を深め、アマモの播種活動の規模を拡大（播種量10,000粒を目標）

### エコツアーの実装

#### ① エコツアーの企画・準備

- ・ R7年度に検討した企画のうち、実行可能なものについて、関係者との調整を進める

#### ② エコツアーの試行

- ・ 実行可能な企画について、市販を開始し、集客力や顧客層等の反応を検証する。

### 尾道のブランド化

#### ① 松永湾里海協議会の運営・拡大

- ・ 協議会を運営し、3つの活動を進めるとともに、一般会員を募集し、活動規模を拡大していく。

#### ② 普及啓発活動・広報活動の実施

- ・ シンポジウムを開催するとともに、環境学習やSNS等を活用した広報活動を検討する。

#### ③ 里海的环境価値を活かした資金調達方法の検討

- ・ 自然共生サイトへの登録やふるさと納税等の里海を活かした新たな資金調達方法を検討する。